

# 田布施町榿の実蠟を活用した企画と実践

小橋 圭介

## 1. はじめに

本研究では、かつて九州・中四国を中心に活用されてきた「榿の実蠟」に着目し、その歴史と文化的背景について考察する。特に、山口県田布施町における「榿の実蠟」と地域住民との関わりを考察し、その課題を「デザイン」という観点で捉え、人や資源、地域との関わりを意識した企画の実施と郷土意識の深化を試みる。本研究における「デザイン」は、図案を描くことや製品に結びつくものではなく、私たちの生活や社会全体に関わり、課題解決のため想像力や構想力を発揮して関係性に働きかける営みとして位置づけている。

## 2. 榿の歴史と田布施町における榿蠟

榿の原産地は中国から東南アジア・インド一带と言われ、諸説あるが日本では天正(1573～1591)頃、彌寝重長が渡唐の商船から榿苗を取り寄せ所領地の小根占に植栽している。元禄・宝永(1688～1711)頃に会津出身の金山職人が、会津の「漆の実」によって蠟を搾る方法から桜島の「榿の実」は製蠟に適していると告げ、成功したという。榿栽培と精蠟技術を最初に確立したのは薩摩藩だが、徳川吉宗は財政再建のため「享保の改革」を断行し殖産興業政策をとり、「榿の木」などの栽培を奨励。これにより、久留米、熊本、福岡、長州、萩、紀州など各藩でも栽培が始まった。鹿児島産の榿苗「薩摩苗」は良質で、九州・中国・四国地方へと伝播され、会津出身の金山職人の伝えた蠟搾り技術も伝播していったと推測される。「島原城キリシタン史料館」に古式の蠟搾り機が展示されているのも注目すべき点である。また、九州出身の農学者である大蔵永常が記した『農家益』にも「地獄搾り」と呼ばれる古式の蠟搾りの図と用具解説があり、これが会津地方の蠟搾りと同型なものも会津から九州への技術伝播を裏付ける。

「松山榿」を作り出した竹下武兵衛は、20年に渡る体験により寛延3年(1750)に榿栽培の技術書『農民錦の囊』を出し栽培方法を指導したが、その技術

は農民への富ではなく藩財政窮迫の打開策として使われた。強制労働の末、榿は「厄病神」として維新後は「親の仇」とばかりに伐り倒されてしまった。

長州藩は天和元年(1681)、藩命によって薩摩に赴き種子を持ち帰っている。暖地を好む榿の木がよく育つ土地は精蠟業が栄える地となり、九州南端の薩摩藩から移出された榿の木とその加工技術は日本の国土を北上していった。榿蠟は高額なため、主に城や富裕層、寺社仏閣でしか使われていない。後に「ビンツケ油」が髪結に使用され、次第に需要が増し各藩の軍事費にあてるほど莫大な利益を得る。しかし、大正期には石油合成品であるパラフィンや安価な輸入蠟、石油ランプ・電灯普及により次第に衰退し、商人は蠟から将来の花形商品である石炭の取り扱いに変革していった。榿の実は全量から蠟が約20%以下しか取れない生産性の低さに加え、育成への過大な手間、採取者の激減なども榿蠟衰退の理由といえる。

江戸時代中期の日本は貨幣経済が進み商業が発達したが、生産手段のない武家階級では参勤交代などの費用が大きな負担になっていた。毛利藩は、当時大阪で「米」以外に人気のあった特産品のうち「塩」「紙(和紙)」「蠟(木蠟)」の生産を奨励した。いわゆる「防長四白政策」である。当時、山口県田布施町近辺で採れる「榿の実」はとても良質だった。同町で結成された「ハゼの実ロウ復活委員会」は、時代の流れの中で忘れられた榿を現代に蘇らせる活動を続けている。メンバーが榿の復興に向けて動き始めたのは1996年。会長を務める町内出身のテレビプロデューサー、田川一郎氏の提案がきっかけだった。おりしも、翌年(1997)にNHKが大河ドラマで毛利元就の生涯を描くことになっていた。人々の関心がふるさとの名君に集まるこの年こそ、地域の主要産業だった榿に光を当てたいと考えた。そのうえ、毛利藩の財政を支えた「防長四白」のうち、県内で復元されていないのは蠟だけだった。一言で榿蠟を復活させるといっても、自生している榿の木か

ら実を採取するより、採取した実に含まれる蠶を搾り、蠶燭に成型する工程のほうが難しい。しかも、江戸時代と同じ方法で復元しようと考えていた。メンバーは古い資料の研究、九州への現場視察を重ね、道具を手作りするところから活動を開始した。そして、12月初旬に蠶の実を採取。自作した道具で蠶を搾り、年末に放送された大河ドラマ最終回の時、手作りの「蠶燭」に火を灯した。

翌年からは「山口サビエル記念聖堂」のクリスマスミサに献灯<sup>1)</sup>、平成13年には県内で開催された地方博覧会「山口きらら博」への参加、平成14年からは「たぶせハゼの実ろうそくまつり」の開催に和ろうそくの発売など、活動を継続している。特にお祭りでは、滋賀県から和蠶燭職人（近江手造和ろうそく「大興」・大西明弘氏）を呼び、ろうそく作りの実演も行い、地域の資源と日本の伝統を今に伝えている。また、巨大蠶燭やまわり灯籠の制作、「しあわせを呼ぶ福蠶シリーズ」の名でフクロウやサンタクロースの形をしたキャンドルを販売するなど、和蠶燭のイメージにとらわれない多彩な蠶燭も生み出してきた。

平成15年から、カナダの自主停電運動に端を発した「100万人のキャンドルナイト」が日本各地で開催されるようになると、田布施町でも「キャンドルナイト in たぶせ」を開始。毎年、夏至の日に田布施川の岸辺に200本以上の蠶燭を並べ、電気を消すささやかな環境運動に参加したいという人々に優しい灯りを提供している<sup>2)</sup>。

更に、小学校の総合学習を支援する活動も行っている。平成10年に始まったこの活動は一度も途絶えることなく今も続き、子供たちは昔ながらの製法で蠶搾りを体験し、「物のありがたみ」を実感している。

### 3. 田布施町フィールドワーク

蠶の実蠶をきっかけに岡部氏や田布施町との縁が生まれた。蠶の実蠶以外の資源や、人、土地などを発掘していくためフィールドワークや町史による調査を行った。

田布施町ではかつて綿織物の生産が行われており、江戸時代中期頃までは綿を大阪より買い入れ、船積みして移入していた。その後、岩国地方において綿花の栽培が盛大となり、やがて岩国産の繰綿を移入するようになった。紡いだ糸を織るには、江戸

時代は地機（代表的型・大和機 - 長さおよそ4尺、幅およそ二尺五寸ばかりの木製の枠で構造を成す）を用いた（図1）。大和機の構造は単純なため、製品のよしあしは織人の技術に依存する面が強かった。生産された綿織物は、主として柳井に運ばれ大阪市場へ船で輸送された。田布施町は、他国繰綿や他国売り綿織物などを取り締まる綿制道場が設けられていたため、綿織物流通の拠点の一つであった。

江戸時代においては、平生湾一帯で広く塩田が営まれていた。その影響を受けて、周辺農村では塩菰、塩縄、蓑、笠などの塩田関係の商品が盛んに生産された（図2）。三余（冬・夜・雨）の暇には、縄・筵の産業を出精すると記録が残っており、塩田関係商品は、農閑余業として生産されていた。その中心になったのは男性であり、女性の綿織物生産とならんで多大の現金収入をもたらした。明治頃から、需要の関係や台風被害による休止などにより、塩田は田地へと変わっていった。

蠶の実は生蠶を絞る原料として貴重視され、田布施町域諸村に藩の奨励によって蠶の木が植えられた。史料によると、本土から離れている「馬島」においても少量ではあるが栽培されており、その熱心な取組ぶりが見て取れる（図3）。

田布施町域諸村は、商品流通に強く結びついて生産活動を行っていた。木挽、紺屋などの諸職人や商人が多く存在しており、商業が盛んに行われていたことが伺える。その様相は、「田布施市は、瓦屋根と茅屋根が相半し、町も三筋ある。産業の物品の売買に、月に二斎の市立がある。」<sup>3)</sup>とされ、近隣の諸村まで巻き込んだ盛大な市が立っていた。しかし、幕末期には困窮してしまい、文久2年（1862）復興策が出されている。

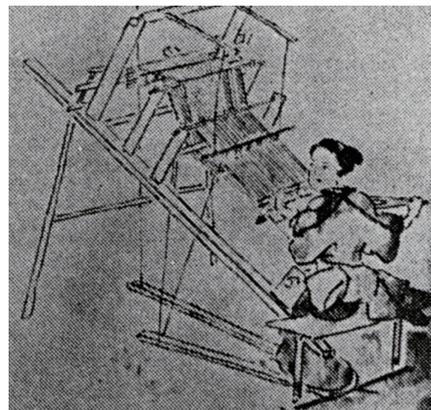


図1 綿織物 高機 『民家検労図』より

	塩菰・筵	代 銀	塩縄・縄	代 銀
麻 郷	21,800	3,270	1,400	700
別 府			1,500	1,050
上田布施	31,038	9,885	13,866	9,750
下田布施	203,630	14,050	733	539
波 野	88,000	7,040	150	120
大波野	62,500	6,250	2,080	1,248
宿 井	6,000	300		

図2 田布施町域諸村・農閑余業生産物  
『防長風土注進案』より

村	榧 実	代 銀
	貫	貫 匁
麻 郷	552	1.048
別 府	280	560
上田布施	1518	3.036
下田布施	573	1.146
波 野	2600	1.300
大波野	720	1.369
馬 島	9	0.018
宿 井	800	1.760
川 西	2000	4.400

〔備考〕 宿井村の代銀は推計値  
『防長風土注進案』による。

図3 田布施町域榧植生状況 (天保年間)

現在、かつての活気を直接的に見る機会はない。そのような点において、田布施町の宿井地域にある「宿井の榧の木」の存在は非常に稀有である(図4)。戦後、榧の原料になる榧は拡大造林政策期に伐採され杉や檜に植え替えられたが、傍にお地蔵さんがあったためこの木だけは伐られずにすんだ。樹齢240年と推定されるこの木は山口県の天然記念物であると共に、毛利藩の産業振興政策を伝える生証人でもある。しかし、存在を知ってはいても実際に見たことがない人は地元でも多い。お地蔵さんによって残されはしたが、その歴史までが語り継がれ生き残ってはいない。少しずつでも、繋いでいく方法を導き出していきたい。



図4 宿井の榧の木

#### 4. 榧の実蠟の活用

「蠟=蠟燭」のイメージが強いが、化粧品、医薬品や食料品など、蠟には様々な特徴がある。決して表舞台ではないが、縁の下の力持ちのような役割を担い、私たちの生活に寄り添ってくれている。全てが榧蠟に関わる特徴ではないが、蠟全体に関する特徴として整理する。

##### 榧の特徴

- ①簡単に色んな形を造ることが出来る。(例：キャンドル、蠟人形館、食品模型)
- ②擦れば艶がでて良く滑る。(例：スキーワックス、カーワックス)
- ③融けるとさらさらした液体になり物に浸み込み易い。(例：飲料水紙カップ、耐水ダンボール、防水布)
- ④防湿、防水、保香性がよい。(例：チーズの包装、たばこの包装、果実袋) ポリエチレンフィルムは香りやガスはよく通過するが、蠟は香りを通さない。
- ⑤電気絶縁性に優れている。特にパラフィン蠟は高周波でのロスも少なく防湿性もよいので、広く使われている。(例：コンデンサー、電線)

- ⑥微生物により簡単に分解される。  
(土に埋めれば容易分解されるので、プラスチック類のように廃棄物公害がおきない)
- ⑦人体に無害で衛生上も安全である。  
(石油ワックスを含む天然ワックスの多くは、食品衛生法の既存食品添加物で、食品添加物として使用可能)
- ⑧大きな融解潜熱を持ち、蓄熱材になる。(例：温湿布剤、全身美容、蓄熱材)
- ⑨多くの種類のプラスチックの成形助材、改質材になる。組み合わせによっては0.1%の添加でも効果がある。(例：塩ビ管、エンブラ、低温定着トナー)

#### 蠟の活用方法

プリンタ（溶融型熱転写方式）のインク。  
タイヤなどゴム製品の亀裂防止剤。  
医薬品（軟膏）、化粧品、エステ商品  
接着剤（ホットメルト接着剤）  
農業分野（肥料・農薬、果実袋など）  
建材（石膏ボード、パーティクルボード…）  
蓄熱分野（蓄熱電気温風ヒーター、床暖房など）  
包装材（サンドウィッチ包装紙、クッキングペーパーなど）  
食品工業分野（フルーツワックス、チュウインガムなど）

田布施町における「蠟の実験」の活用方法を模索している最中、女性同士の会話がふと耳に入ってきた。普段、化粧をしない女性が化粧をしてきたことに対して周囲が盛り上がり、当人も周囲の反応にまんざらでもない表情だった。表面上に出さず出さないかは別にして、綺麗になりたい人はいないだろう。いつまでも奇麗であり続けたいという願望に年齢という隔たりはなく、若い女性はもちろん歳を重ねても一様変わらない。子どもも然りである。この時、田布施町で発掘した「点」が繋がってきた。それは、『「蠟の実験」で作った「化粧品」を用いて、「内閣総理大臣」や「ファーストレディ」のように正装しおしゃれを楽しむ』というものであった。「綺麗でありたい」という願望は女性に限らず、男性においても「格好良くありたい」、「いつ

までも若々しくありたい」という願望は少なからずあり、人が持つ根本的な欲求とも言える。ある特定の場所で「コト」を起こそうとした時、差異化も含めてその場にある固有の資源を活用することは極めて重要である。同時に、ある特定の場所に限らず誰に対しても語りかける「根本欲求」を用いることができれば、より多くの人にメッセージを浸透させられるのではないか。情報が蔓延する現在だからこそ、人間が受け止めやすい情報形態を意識しなければならない。

地域を盛り上げる素材として取り上げられるのは、食品や史跡などが圧倒的に多い。作家や戦国武将などもあるが、その人物に対する熱狂的ファンがいないと地域活性化の起爆剤としては活用しづらい。今回扱う「内閣総理大臣」は、人気という点では些か問題はあるが知名度に関しては申し分ない。山口県は全国一の内閣総理大臣輩出数<sup>4)</sup>を誇っているが、その事実を上手く活かしてはいない。内閣総理大臣に熱狂的なファンなどおらず、訴求力のある対象ではないからだ。駅や物産店で歴代内閣総理大臣のイラストがパッケージに入った饅頭やクッキーが細々と販売されているにすぎない。しかし、田布施町が全国で唯一内閣総理大臣を2名輩出している極めて希有な町である点は見逃せない。

アイデアを企画書にして岡部氏に手渡し、後日、田布施町役場にて岡部氏と企画財政課の西本氏、内山氏と打ち合わせを実施した。改めて企画趣旨を説明し、その際に山口市で行われている「日本のクリスマスは山口から」実行委員会への参加・運営や、アートプロジェクト視察についても触れた。特に、主催者側と地域住民との温度差がイベントに歪を与えていることを重点的に話した。一過性のイベントにならないためにも、地域住民に対して呼びかけ内側から働きかけていくことを提案した。

話し合いの結果、第一段として口紅、ポマード、クレヨン制作のワークショップを通して地域の資源や魅力を知ってもらおう企画を催すことになった。ターゲットは、親世代・祖父母世代など幅広い年齢層への浸透のしやすさも意識して小学生にした。企画実施日は、11月9日（佐藤栄作・就任日）と2月25日（岸信介・就任日）と、2名の内閣総理大臣に合わせて2回実施を検討している。日付を固定すると開催曜日が変動するので、就任日のある週末をひとつの目安にして開催日を設けることにした。

役場職員の2人が危惧したのが、口紅が作れるのかという点である。これには、事前に作っておいたサンプルが功をそうした。試作品に触れてもらいながら説明したが、実物があると説得力がまるで違う。役場の2人もこちらの意志を感じ取ってくれたようだ。復活委員会の岡部氏も「ここまでやってくるとは思わなかった。脱帽した。」と笑みをこぼされた。その後も打ち合わせを重ね、予算の関係上「おしゃれ」に重点を置くのが困難になり、最終的に『「櫛の実蠟」を用いて「化粧品（口紅）」や「クレヨン」を作り、「内閣総理大臣」のように未来を描いてもらう』という内容に変更した。

企画は以下の流れで実施する。

1. クレヨン, 口紅, ポマード作りのワークショップ
2. クレヨンを用いて未来の田布施町を描く
3. 蠟搾りの見学
4. 内閣総理大臣・ファーストレディになりきり, 絵を持って記念撮影
5. 絵は田布施町郷土館に展示 (当日の子どもたちの写真も展示)

内閣総理大臣は未来へのビジョンを持ち、夢を描く存在である。子供たちの描く「絵」を、未来への「マニフェスト」として位置づけている。

役場職員が既に加わっているのは、事業を進めていく上で障壁を少なくできる。しかし、実際に企画を動かすとなるとかなり綿密に打ち合わせをしなければならぬことが分かった。連絡先やイベント保険など、5WIHではおさまらない細かい要素で企画は組み上がっている。多くの尽力を借りながら、ひとつずつ課題を解決していった。

## 5. 企画の実践と考察

広報物を役場職員経由で各小学校に配布し、一週間後の参加申し込み者数は3名であった。定員50名にはほど遠い現実を突きつけられた。その後も週毎に報告を受けていたが、思うように伸びてはなかった。理由のひとつに、対象年齢と開催時期にあった。小学校4・5・6年生を対象にしていたが、この学年はスポーツ少年団でレギュラーとして活躍していて週末も忙しい。更に、11月は気候も良いため行事毎が多い。対応策として、小学校低学年や町外小学校も視野に入れて、役場職員が根気よくチラシ配布や知り合いへの声かけを実施してくれた。最終的に31名の参加者を集めることができた。

開催前に、口紅に使用する材料の安全性を業者に確認した。すべて天然素材であり、化粧品や薬用品としても活用されている素材ばかりなので基本的には問題ないが、「天然素材=安全」ではない。企画の際に注意喚起をし、使用素材と仕入れ先、異変があった場合に使用をやめるよう保護者へプリントを配布して対応した。

当日スタッフは、役場職員4名とハゼの実口紅復活委員会6名、食生活改善推進員2名と筆者である。食生活改善推進員は会長、副会長が応援に駆けつけてくれ昼食用のカレーを調理してくれた。直前まで役場職員(男性)が調理する予定だったため、2人の参加は大変心強かった。企画自体は終始和やかに進み、子どもたちも保護者も大変満足してくれていた(図5-1,2,3)。終了後のアンケートの集計結果からみても、それは見て取れた(図6)。併せて、当日の様子を新聞にて広報できた(図7)。



図5-1, 2, 3 田布施町イベント風景

● 楽しかったですか？

口紅・クレヨン		19		1		2		1		0	
お絵かき	とても楽し	15	楽しかった	3	普通	4	楽しくなかつ	1	とても楽しく	0	
写真撮影	かった	6		4		11		1		なかった	1
蠟絞り見学		16		2		5		0			0

● 難しかったですか？

とても難し	3	難しかった	10	普通	6	簡単だった	3	とても簡単	1
かった						だった		だった	

● 参加してみたいですか？

はい	23	いいえ	0
----	----	-----	---

● 田布施町を知るきっかけになりましたか？

はい	22	いいえ	0
----	----	-----	---

※ 

普	1
---	---

● 今後、やってみたいワークショップはありますか？（自由記述）

ダンス(2)、バスケ、消しゴムづくり(2)、田布施で有名なものを作りたい、ハゼの実でロウソクを作ってみたい(3)、鉛筆づくり(2)、細いクレヨンづくり、歯ブラシ、おやつ、ハガキ、折り紙、種、玩具、ソーラーカー、割り箸、クーピーづくり(2)、太鼓、マニキュアづくり、粘土

● 榎の実蠟が、田布施町の資源だったことを知っていましたか？

はい	19	いいえ	2
----	----	-----	---

● 田布施町が全国で唯一、内閣総理大臣を二名輩出した町であることを知っていましたか？

はい	20	いいえ	1
----	----	-----	---

● イベントの開催時期

早	0	丁度	20	遅	1
---	---	----	----	---	---

● イベント開催時間

短	0	丁度	16	長	5
---	---	----	----	---	---

● 参加料金

高	2	丁度	16	安	3
---	---	----	----	---	---

● また、参加させてみたいですか？

はい	21	いいえ	0
----	----	-----	---

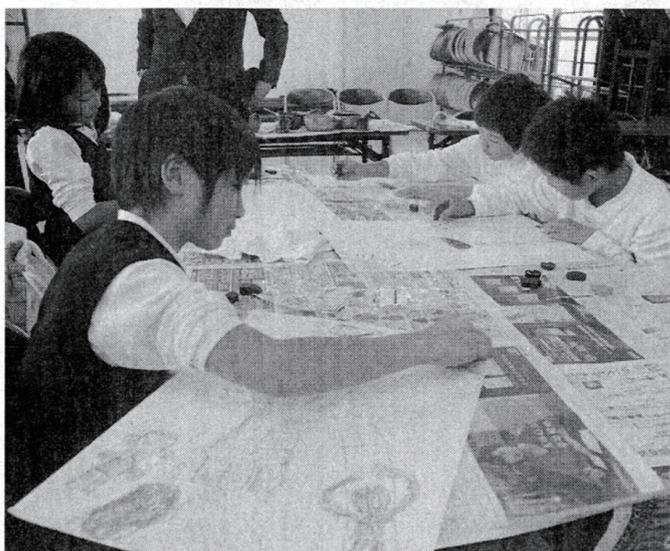
● 自由記述

- ・とても楽しかったです。ありがとうございました。
- ・とても貴重な体験ができて、良かったです。お世話して下さった皆様、ありがとうございました。
- ・めったにない体験をさせていただき本当に良かったです。指導者の方、お世話になりました。もし可能であれば、教えてくださる内容を統一していただけると迷わずにすむと思いました。指導される方によってやり方が違ったりしたので…
- ・とても素敵な体験をさせていただきありがとうございました。

図6 田布施町イベント・アンケート集計結果

# ハゼの実ろうクレヨンで夢描く

## 田布施町知るイベントで児童



ハゼの実ろうで作ったクレヨンで将来の夢や田布施の将来像を描く子どもたち=10日、田布施町

田布施町宿井の城南公民館で10日、田布施町を知る日イベント「みんなde総理大臣&ファーストレディー」が開かれ、地元の小學生31人がハゼの実ろうで作ったクレヨンで将来の夢や町の将来像を描いた。

同町は故岸信介、故佐藤栄作兄弟宰相の出身地。一方、江戸時代に毛利藩が奨励したハゼの実ろう作りを、同町有志による「ハゼの実ろうで将来の夢や田布施の将来像を描く」を開催した。岡部事務局長らが持ち込んだ立ち木式ハゼの実ろう搾り機によるろう搾りの実演を見学したあと、描いた絵を持ち、総理大臣やファーストレディーになりきって記念撮影をした。

田布施ソリーを描いた東田布施小5年、宇多大翔君(10)は「ハゼの実ろうからクレヨンができてるのは知らなかった。大きくなったら田布施に巨大ソリーを建てたい」と笑顔を見せた。樹木の家を描いた同小5年、長谷川こころさん(10)は「樹木の中に家を作ったら楽しい」と喜んで描いた。

図7 新聞記事(山口新聞 2012年11月11日(日)掲載)

次回開催に向け課題を整理する。

- ①電源系統の問題：蝋を溶かす際に、多くの「ホットプレート」を用いた。事前に予想はしていたが、ブレーカーが落ちグループによって作業スピードに差が生まれた。
- ②ワークショップのボリューム：口紅、ポマード、クレヨンの制作、ろう搾りの見学、絵画制作、写真撮影とかなりのボリュームを盛り込んだ。
  - ①の電源系統の問題もあり、時間の兼ね合いでポマード制作を断念せざるをえなかった。
- ③開催時間の改善：ワークショップのボリュームの関係もあり、10時から15時までと約半日にわたる時間を要した。アンケートでも、午前中だけであればもっと参加しやすいという声もあった。今回参加出来なかった方も、役場に同様の意見を寄せている。時間とワークショップボリュームのバランスは今後の検討課題である。
- ④企画趣旨に対する問題：企画開催直前、田布施

町町会議員から企画趣旨に対する質問が役場と筆者にあった。企画名に「内閣総理大臣」があることに對し、岸・佐藤内閣を一義的に捉え美化するような言動は控えてくれとのことだった。選挙間際ということもあり、本企画に政治的思惑がないのかについても質問された。意図を説明して誤解を解くことはできたが、少数とはいえこのような考えを持つ人もいる。企画開催時期の設定は、単純に他イベントとのバッティングを避けるだけでなく、イベント以外の行事も視野に入れて検討する必要がある。素材の特性上、政治的な背景から逃れることはできないため、「内閣総理大臣」を状況によっては後景化していくことも視野に入れていかなければならない。

田布施町に自身のアイデアを提示し形にしていく中で、改めて「地域活性化」の必要性について

		地域内	地域外
人	発信者	田布施町、ハゼの実ロウ復活委員会	教育機関（筆者）
	受容者	地域住民	観光客（皆無）
資源		蠶の実（ロウ）、内閣総理大臣、古代米、綿織物、塩田、古墳	蠶製品、古代米、米粉パン、いちじく製品
空間・環境		宿井の蠶の木、交流館、詩情公園、ハミングロード、馬島	田園風景、田布施川流域、馬島周辺海域
メディア		チラシ、新聞	新聞、Web
時期		年2回開催（2月、11月）	柳井まつり（11月）、稲穂祭（周南市・11月）

図8 田布施町イベントマトリックス

考えた。誰が「地域活性化」を求めているのか、部外者の勝手な押し付けになっていないか、非常に重要な観点である。本企画をマトリックス<sup>5)</sup>に当てはめ各項目を整理した（図8）。「域内」を意識したあまり、「域外」への働きかけをあまりにも蔑ろにしているのを見て取れる。その是非は別にして、閉鎖的になっているのは間違いない。上記の企画改善点とは別に、企画の在り方そのものについても検討余地がある。

考えられる「域外」要素として、本学在学中の田布施町出身者を挙げる。本企画を話したところ興味を持ってきており、聞くところによるとその内一名は小学生時代に岡部氏らが運営する「蠶搾り体験」を経験しているようで懐かしがっていた。岡部氏の蒔いた種が、すくすくと育っている姿を垣間みた瞬間でもある。今回は、残念ながらサポートをお願いできなかったが、次回以降は協力要請をお願いしている。彼らは高校生まで田布施町にいたが、小学生以降ほとんど地元のイベントには足を運んでいないようだ。そのような経験を持ち且つ現在町外にいる彼らが、田布施町の資源を題材にした企画に関わることで、彼らや地域住民双方の刺激になるのではないかと考える。若者が田布施町のイベントへ魅力を感じていない理由を浮き彫りにするきっかけとなる「場」にもしていきたい。

また、福岡県久留米市を拠点にする「松山蠶復活委員会」代表・矢野氏が本企画に興味を持ってくれた。矢野氏は製蠶会社や蠶農家などとの交流もあり、蠶関連商品も手掛けている。「蠶」産地との連携も踏まえ「域外」へと視野を拡げていく好

機になる。

本企画では、「内側からの萌芽」,「外部からではなく地元に根ざしたもの」を意識し企画を実施した。ワークショップの一環として「蠶蠟」という地域資源の活用用途とその可能性を伝える点では意義があるが、それは極めてアーティスト的発想に過ぎなかった。残念ながら、自分たちの生活そのものを顧みるまでには至らなかった。

改善すべき点は多々あるが、一方で徹底した「域内」への働きかけによる効果もあった。役場職員や地元団体の活発化や積極的な取り組み姿勢など、今までとは異なる変化も生まれている。企画終了後、役場から次年度に立ち上げる新しい企画や、例年開催される「さくらまつり」におけるワークショップの企画など、筆者にアドバイザーとしての協力要請がきている。確実に「郷土意識の深化」の芽生えは起こっており、大輪までの道のりは長いとその成長を関わりながら観察していきたい。

田布施町というある特定の地域を「域内」とし、それ以外を「域外」として企画を実施した。しかし、この域内外は便宜的に用いられているに過ぎず、見えない枠内の存在こそ本研究における企画の「閉塞感」を高めていたのではないかと推測する。域内外という観点は、特定の地域を越えて広く伝えるための通過点として捉えることが重要であり、独断的な枠組みによって差別化を図り「個性」を作るためにあってはならない。

「蠶＝蠟燭」というイメージを払拭することで新たな道が開けるのではないかと思案してきたが、その可能性は継続して検討していく。特に「蠶蠟クレヨン」については、融点が低い特徴を活かし

新たな画材としての活用法を模索していきたい。

田布施町で開催した活動がきっかけとなり、翌年となる2013年に福岡県朝倉市から榎関連の講演依頼があった。朝倉市は田布施町と同じくかつては榎で有名な地であり、現在もNPOを立ちあげ積極的に榎の保存や栽培に力を注いでいる。今回も「第二回 朝倉・榎フォーラム」として、榎植栽に関する報告や東日本大震災で話題になった奇跡の一本松の後継樹を手がけている住友林業(株)の中村健太郎氏を招いた講演など、榎の可能性を呼びかける活動を開催している。筆者は、田布施町で実施した活動の事例報告とクレヨン作りのワークショップを担当した。

#### 事例報告：

単に「榎蠟」を用いたワークショップではなく、地域に根ざした資源を活用し物語性のある活動を評価する意見もあった。学術的な側面、現場における視点など、多角的に榎と向き合える機会となり、非常に有益な場となった。

#### クレヨン制作：

子どもを対象としたワークショップの予定だったが、実際はほとんどが榎蠟関係者もしくは地域作りの運営に関わられている方々だった。参加者たちは童心に返り、嬉々としてクレヨン制作に取り組んでいた。溶けたクレヨンを型に流し入れるだけでなく、粘土のように手でこねて整形したグループもあり、ワークショップを更に発展させていくアイデアも生まれた。また、多くの参加者が地元でもイベントを開催する意志を持っているため、更なる活動規模の拡大が予想される。(図9-1,2)

本フォーラムはインターネットを活用した動画配信も行っていたが、まだまだ榎蠟に興味がある一部の層にしか開かれていないのが実情である。今後どのように一般大衆に広めていくのが課題ではあるが、まずは点在している榎関係者(生産者、販売者、地域づくり関係者など)のネットワークを束ねていくプラットフォームの構築が急務だと考える。

#### 6. おわりに

本研究では、「デザイン」の在り方や「郷土意識の深化」について実践的活動を通じて考察してきた。「榎」を中心に活動を深めていくことで、その



図9-1,2 クレヨン制作のワークショップ風景

活動が九州や四国, 中国地方に伝搬していった「榎」と同じように、多くの関係者との交流に繋がった(図10)。かつて「榎」は、薩摩藩から九州・中四国へ広く伝播していった。地域を横断していった榎という資源だからこそ、現在主流であるお互いの「差異」から個性を打ち出し地域性を発信していく方法ではなく、「榎」という共通項でより広域に活力を生み出すことが可能だと考える。現場視察を重ねることで、厳しい現状や問題点も認識できた。お互いに情報交換や情報共有を重ねながら、更なる展開を模索していきたい。

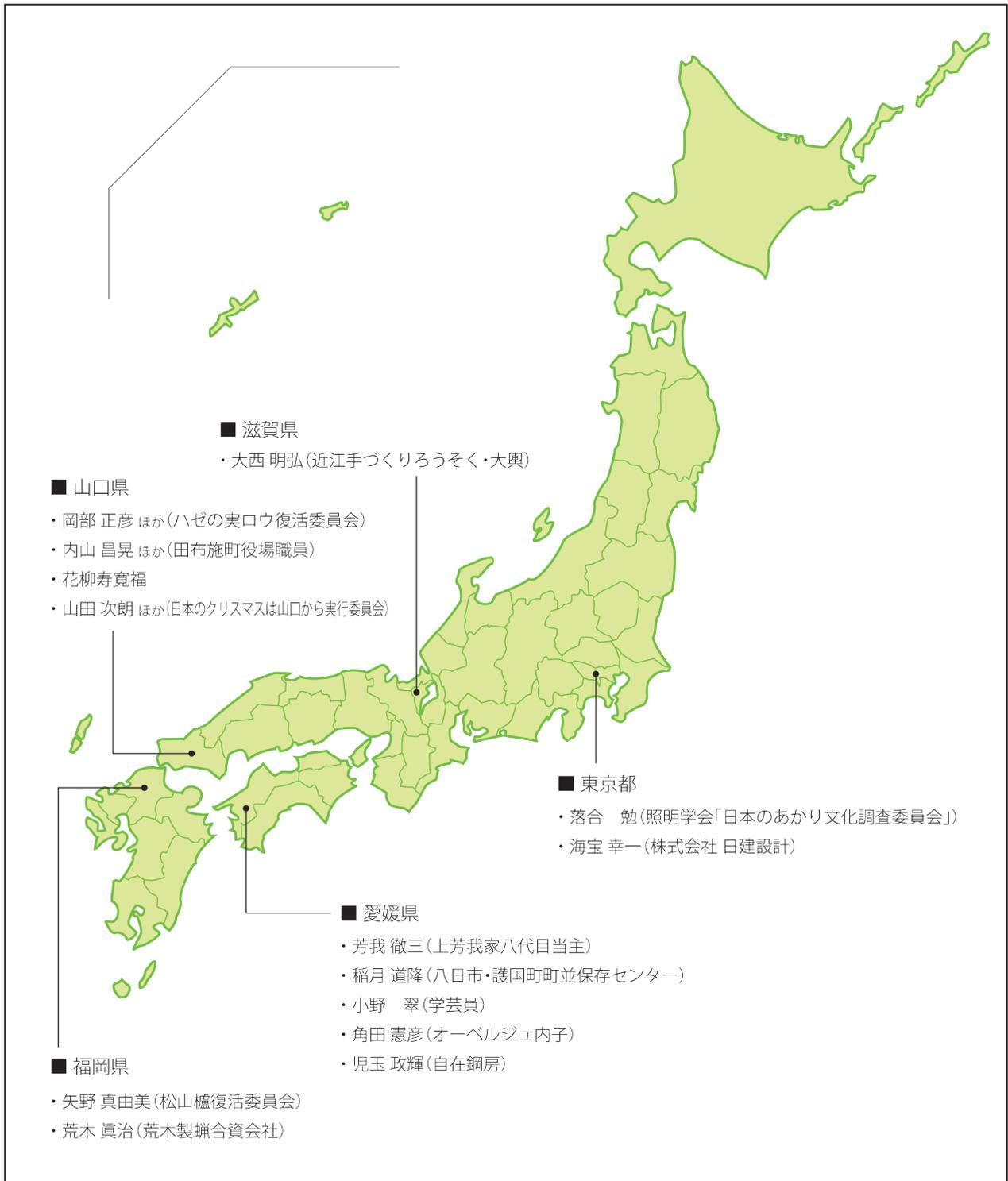


図 10 櫓・灯り関係者分布図

■ 補注及び引用文献

- 1) 平成10年(1998)に神父が変わってからは、献灯は行われていない。
- 2) 残念ながら、キャンドルナイトの蠟燭が全て「和蠟燭」という訳ではない。
- 3) 編集・発行 田布施町『田布施町史』, 2007
- 4) 山口県出身の内閣総理大臣は9名(2013年12月17日現在)
- 5) 下村 泰史, 佐藤 久恵 “風景づくりと流域市民のコミュニケーション:天若湖アート・プロジェクト(平成24年度日本造園学会全国大会研究発表論文集(30))”における評価マトリックスを引用,一部項目を追加した。

(<http://nippon.zaidan.info/index.html>)

雑誌論文

佐々木 長生「蠟絞りの技術をめぐって」『民具マンスリー』第31巻10号, 神奈川大学日本常民文化研究所 1999 pp.7078~7084

■ その他

「ハゼの実ロウ復活委員会」事務局長 岡部氏によるご教示

「村田清風記念館」館長 大谷氏によるご教示

■ 参考文献

単 著

宮本常一『宮本常一著作集40 周防大島民俗誌』未来社, 1997

編 著

山口商工会議所やまぐち歴史・文化・自然検定実行委員会『やまぐち本』, 2009

天若湖アートプロジェクト実行委員会編『天若湖アートプロジェクトあかりがつなぐ記憶』キョートット出版, 2009

西村幸夫編『観光まちづくり まち自慢からはじまる地域マネジメント』学芸出版社, 2009

府瀬川健蔵監修『ワックスの性質と応用』幸書房, 1993

編集・発行 田布施町『田布施町史』, 2007

日本ナショナルトラスト編『自然と文化』72号「蠟燭」2003日本財団 図書館

# Planning and Implementation of Projects Utilizing Sumac Wax in Tabuse-cho, Yamaguchi Prefecture

KOHASHI Keisuke

This study focuses on sumac wax which has been utilized, although more commonly in the past, mainly in Kyushu, Chugoku and Shikoku regions of Japan, and discusses its history and cultural background. Especially, the relation between local residents and sumac wax in Tabuse-cho, Yamaguchi Prefecture is discussed and, capturing the challenges from the viewpoint of “design,” the study attempts to enhance hometown consciousness and to implement projects which are formulated with the awareness of the involvement between people, resources and local communities. Activities concerning the term “design” used in this research do not relate to drawing designs or creating products, rather, they are regarded here as activities that relate to our lives and the entire society, exhibit creativity and imagination for solving problems, and influence various relations.